

自校の課題解決に向けた主幹教諭としての取組

郡山市立金透小学校
主幹教諭 久野 雄平

はじめに

本校で担任として3年間勤務する中で、研修主任や生徒指導主事等を務めた経験を踏まえ、管理職と教職員とをつなぐミドルリーダーである主幹教諭として、「本校の様々な課題解決のために何ができるのか」と自ら問い続け取り組んできた。ここでは、具体的実践について紹介する。

1 実践の内容及び方法等

(1) 先生方一人一人が、個性を発揮し充実感や達成感を味わえる授業研究へ

本校には、これまで大切にしてきた考え方に「学校の生命は授業」という言葉がある。日々の授業において、先生方一人一人の授業力の向上を図っていくことが、先生方の専門性を高めるとともに、個性を発揮し充実感や達成感を味わう機会を増やすことにつながると考える。さらには、児童の学力向上にもつながっていくと考える。その中で、教務主任として、授業研究やその後の研究集録編纂に積極的にいかかわることを通して、これまでの自分自身の経験や教科の専門性をいかして、先生方とともに子ども主体の授業づくりの在り方について考えてきた。

① 研究主題「学びを創る」と学力向上に向けた授業改善

今年度は、研究主題「学ぶを創る」、副主題「『個で追究する力』を育む授業の創造」の4年次である。初年次、2年次では、研修主任として研究の理論構築を先生方とともに進めた。そして昨年度、今年度と教務主任という立場で、これまでの経験を踏まえて積極的に授業研究にもかかわることとした。

② 研究主題「学びを創る」とは

子どもたちは、学習の対象である教材と出合うことにより、生活経験や体験などと関連付けて問いをもつことができる。そして問いをもつことが、自ら解決方法を選択・決定して主体的に追究していくことにつながる。

また、互いの考えを表現し合ったり認め合ったりすることで、共通点や差異点を見いだしたり、関連付けて多面的・多角的に思考したりして、自分の考えを広げ深めていく。

こうした学びを通して、自己の学びの高まりと育ちを実感し、学ぶことのよさや楽しさ、達成感を味わい、新たな学びへの意欲をもつことができる。さらに、身の回りの事象や他教科の学びへ視野を広げながら興味・関心を高めることで、子どもたちは学び続けていくことができる。私たちは、1単位時間や1単元、そして1年間を通してめざす子どもの姿を以下のように捉えた。

<「学びを創る」子どもの姿>

子ども一人一人が、自ら問いをもって最適な解決方法を選択・決定して追究し、互いの考えや思いを表現し合うことを通して、自分の考えを広げ深める。

自己の高まりや育ちを実感しながら新たな学びへの意欲をもって、身の回りの事象や他教科の学びへ視野を広げ、追究し続けていくことができる。

③ 「個で追究する力」とは

「学びを創る」子どもの姿を具現化するために、育みたい資質・能力を、「個で追究する力」と明確にして研究を進めた。以下の4つの力「自ら問いをもつ力」「根拠をもって選択・決定できる力」「自分の考えや思いを他者と比べる力」「学びをつなげる力」を、授業において育む資質・

能力と考え、授業者一人一人が、この4つの力の高まりを見とるために、学年の実態及び学習内容の系統性、各教科の本質を踏まえるとともに、学習指導要領で示されている3つの資質・能力や評価の3観点とのつながりを意識して、めざす子どもの姿を具体的に設定した。

④ 「『個で追究する力』を育む授業」とは

「個で追究する力」を育むためには、子ども一人一人が自ら問いをもって、主体的に追究していく時間が必要である。また、一人一人が自らの問いを追究して得た知識や既存の知識をいかし、学級全体で新たな問いを追究したり、互いの考えを比較・関連付けたりして、協働的に学びを深める時間もある。単元を通してこれら両方の学びの時間を充実させることが、個で追究する力を育むことにつながると考えた。そこで、授業において以下の2つの学びを大切に実践を重ねた。

- 「個による学び」
「自分自身で見いだした内発的な動機付けによる問いを追究する学び」
- 「協働による学び」
「個による学びで得られた知識やそれまでに深めた学びをいかして、新たな問いについて協働して追究する学び。教師による働きかけや発問など外発的な動機付けによる問いを追究する学び」

(2) 児童や保護者に寄り添う積極的な生徒指導

本校での担任としての勤務経験をいかし、児童や保護者に寄り添う積極的な生徒指導を実践したいと考えた。具体的には、朝の登校時、昇降口で全校児童を迎え、元気にあいさつを交わすとともに子どもたち一人一人の表情や様子を観察することを心がけた。また、校舎内ですれ違った際にも、こちらから積極的にあいさつや会話を交わすようにした。特に、気になる児童については、些細なことであっても、担任をはじめ管理職と情報共有することで、一人一人に寄り添った積極的な生徒指導につなげていきたいと考えた。

(3) 教職員の「働き方改革」の推進

① ボトムアップでの「働き方改革」に向けた共通理解

これまで本校でも、長年「多忙化の解消」が大きな課題となってきた。持続可能で働きやすく先生方一人一人が働き甲斐を感じる職場の実現をめざしていくことが、喫緊の課題であった。そこでまず、「何のための働き方改革なのか」について共通理解を図った。1学期終了時、改めて学期を振り返り研修資料を活用しながら、その目的について共通理解を図った。その中では「生み出した余白をどう使うか、何に使うかの意識改革」と掲げ、各種行事や業務内容の見直しを図ることで、「子どもと向き合う時間の確保と充実へ」「そこから生まれる気づきを授業改善へ」「自主公開する研究校として学びの質の向上へ」について共通理解を図ることとした。

② 取り組みの見える化と「実感」の共有

校内衛生委員会を定期的開催するとともに、普段から先生方が感じている多忙感や課題意識に寄り添いながら、各学年やブロックから意見を集め、先生方の声に広く耳を傾けた。その際、学期ごとの反省に記入欄を設けたり、ブロックや学年で自由に話し合う場を設けたりした。その後、改めて校内衛生委員会や企画委員会において協議するという流れで、確実に先生方の考えが反映できる形をとった。特に、各種行事や業務内容の変更に関して、管理職より助言や指導をいただきながら「優先順位」を付けて先生方に提示するようにした。そうすることで、直ちに改善や変更できる項目、今年度中に変更可能な項目、継続的に検討が必要な項目などと一覧表にして「見える化」し、課題解決に向けての取組を、全体で実感できるようにした。

③ 過去2年間で実施した主な項目

- 日課表の見直し、表記の改善

- 研究公開に向けた研究集録の内容の見直し
- 各種会議資料のデータ化
- SSS への依頼を効率的に行うための「依頼書」の導入
- 校務支援システムの「気づき」機能活用、児童個票の共有（情報の一元化と簡素化）
- 各種学校行事の内容の見直し及び削減
- 欠席連絡の電子化

※ 上記は主なものを抜粋

2 実践の実際と成果

(1) 授業において主体的に学ぶ子どもたちの姿から

第3学年1組社会科「出動！郡山のじまん調べ隊」では、交番への見学や警察署の方の出前授業を通して、交番の仕事について学んだ子どもたち。子どもたちの反応や表情を見ながら、市内2か所の警察署と市内にある交番の位置と数（11か所）を、1か所ごとに地図上にシールを貼って分布地図を完成させ提示した。すると子どもたちは、警察署に比べて交番が多くあることに気づき、「なぜ交番がたくさんあるのか」という本時の問いをもち、その理由について考え始めた。「現場に行く時間を短くできるから。」「警察署と交番が協力しているからかな。」「交通が発達した駅の近くに集まっているから。」等、地図が、立地や事故・事件現場からの距離、交番間の距離など、根拠を示す資料となり、これまでの学びや地図を根拠に考える子どもたちの姿は、「根拠をもって選択・決定する力」の高まった姿であった。このように、授業研究の成果の一端が子どもの姿にも表れていた。授業研究において、互いの先生の授業参観し、子どもの姿を共有することで子どもの学びを多面的に理解するとともに、先生方のよさや強みを伝え合うことで、日々の授業にも還元できるようにしていくことを大切にすることができた。



写真1



写真2

(2) 全国学力・学習状況調査より

令和6年度全国学力・学習状況調査において、全国平均正答率に比べ国語科が8.4ポイント、算数科が10.6ポイント上回った。また令和7年度においても国語科が8.4ポイント、算数科が10.6ポイント上回った。さらには、全国学力・学習状況調査の質問紙調査からも、子どもたちの内面の成長が見られ、授業研究の成果の一旦が表れている。以下の質問項目は全国比で10ポイント以上上回っている項目である。（表参照）本校児童は、授業におけるPC・タブレットなどのICT機器を積極的に活用し、自分自身が様々なスキルを身に付けていると肯定的に捉えている割合が高い。また、学習する意義を見出し学びを深め視野を広げていることを実感している児童の割合が高く、日々の授業（教科、特別活動）やその他の学級や学校での生活が充実していることの表れであると考えられる。さらに、先生方を信頼しているとともに、関係性も良好であると感じる児童の割合が高く、自己肯定感・自己有用感が高い児童が多いことが分かる。このように子どもたちの質問紙調査結果からも、先生方が日々の授業を大切に、質の高い学びを積み重ねてきたとともに、学校が児

童にとって安心して学ぶことができる場になっていることが分かる。

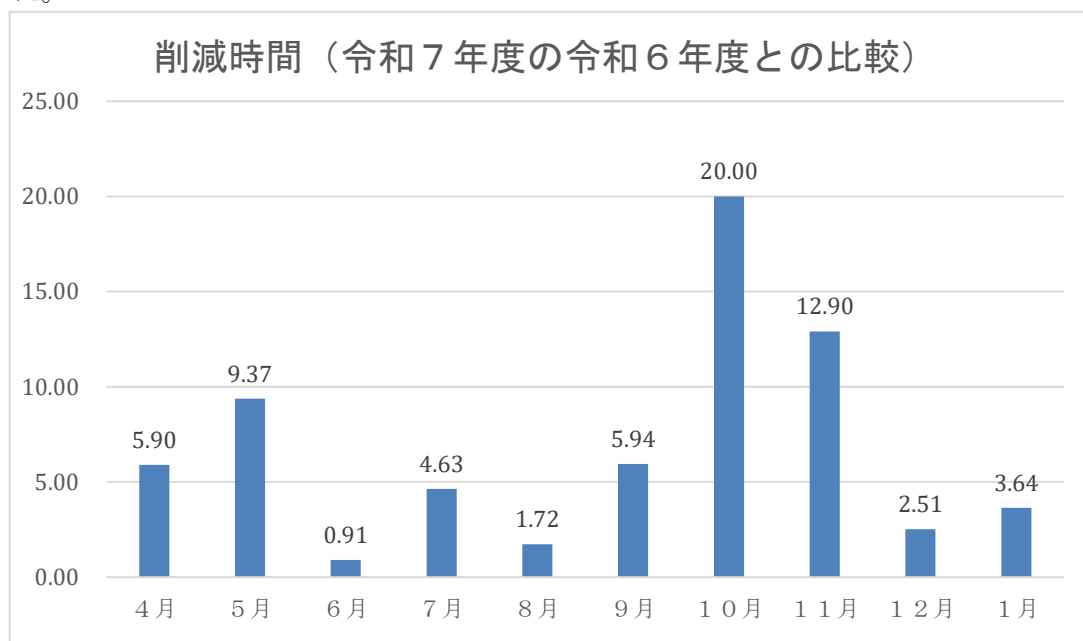
<質問紙調査の結果>

※「当てはまる」「している」と答えた割合（全国比+10ポイント以上の項目を一部抽出）

- ・自分には、よいところがあると思いますか。
- ・先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。
- ・人の役に立つ人間になりたいと思いますか。
- ・PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか（ほぼ毎日）。
- ・学習した内容について、分かった点やよく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか。
- ・授業で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりすることができると思いますか。
- ・先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて分かるまで教えてくれていると思いますか。
- ・授業や実生活では、友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか。
- ・あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか。
- ・道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか。

(3) 教職員の意識改革と時間外在校時間の変化

これまでの取組の成果の一つとして、先生方の働き方に対する意識も変化してきた。自分自身のワークライフバランスを意識しながら働くことで、時間外在校等時間も、ほとんどの月で昨年度の同じ月を下回った。



グラフ 時間外在校等時間の削減時間の比較

3 課題及び今後の取組の方向性

主幹教諭として、自校の課題を的確に捉え、校務全般について広い視野に立ちながら目を配り、引き続き学校の課題解決に尽力していきたい。また、児童一人一人に寄り添いかかわることで、児童、保護者、先生方とを「つなぐ」ための積極的な生徒指導を大切にしていく。そのことで、学校が信頼され安心できる場になると考える。そして、「何のための『働き方改革』なのか」について共通理解を図りながら、学びを創る子どもたちを主役にした授業づくりを大切にするとともに、持続可能な教育研究や教職員にとってより働きやすい職場づくりに努めていきたい。